受賞報告

当院における潰瘍性大腸炎関連大腸腫瘍の治療実態と成績

角　田　恵　理

杏林大学医学部３年

背景

潰瘍性大腸炎（UC）関連大腸癌（UCAN）は，UCによる慢性炎症を背景とする炎症性の発癌様式であり，一般的な腺腫由来の大腸癌とは異なる[1)]。UCANではp53変異が早期から出現することが知られており，病変はしばしば異時性または同時多発し，また平坦な病変が多く，早期の内視鏡での指摘が困難なことが多い[2)]。UCは若年発症も多く，一般的な大腸癌スクリーニングの対象年齢に満たない場合もあるため，７年以上のUC罹患歴を有する全大腸炎型UC患者ではサーベイランス大腸内視鏡検査（CS）が推奨されている[3)]。しかしながら，近年UC患者数の増加により，全症例に対して定期的に施行することは容易ではなく，現実的なサーベイランス体制の構築が課題となっている。

方法

2012年１月から2025年３月の期間にUCANと診断された36例を対象とし，患者背景（年齢，性別，罹患期間，病型，内視鏡施行日など），癌の臨床的特徴（占拠部位，病理組織所見，病期〔Stage〕），治療内容および転帰を検討した。

結果

36例のうち，UCANの同時多発症例は11例であった。病期はStage ０–IIが27例（75.0％），Stage III–IVが８例（22.2％），不明が１例であった。全生存期間および無増悪生存期間の解析では，死亡・再燃は概ね３年以内に認められ，Stage III–IVの症例では予後不良であった（P ＜ 0.01）（**表１**）。また，進行病期（Stage III–IV）での診断と，診断前２年以内にCSを施行するRoutine colonoscopyの有無との間に有意な関連を認めた（P ＜ 0.01）（**表２**）。

表１

	Survival (N=29)	Progression (N=7)	P value
Age (median IQR, years)	56 (45–67)	51 (40–58)	0.35*
Male (n, %)	21 (72.4%)	6 (85.7%)	0.65†
Family history of colorectal cancer (n, %)	8 (27.6%)	0 (0.0%)	0.31†
Concomitant Primary Sclerosing Cholangitis (n, %)	0 (0.0%)	1 (14.2)	0.19†
Onset age of Ulcerative colitis (median IQR, years)	41 (27–54)	31 (20–48)	0.35*
Disease duration (median IQR, years)	16.0 (11.0–22.0)	20 (0–28)	0.98*
Disease type; pancolitis/lest-sided/proctitis, (n, %)	19/6/4 (65.5/20.7/13.8)	2/4/1 (28.5/57.1/14.2)	0.12†
Smoking; current/past/never (n, %)	3/6/20 (10.3/20.7/69.0)	1/2/4 (14.2/28.5/57.1)	0.84†
Single/Multiple (n, %)	22/7 (75.9/24.1)	3/4 (42.9/57.1)	0.17†
Stage 0–Ⅱ/Ⅲ–Ⅳ	27/2 (93.1/6.9)	1/6 (14.3/85.7)	<0.01†
Routine Colonoscopy; Yes/No (n, %)	22/7 (75.9/24.1)	3/4 (42.9/57.1)	0.17†

*Mann-Whitney U test
† Fisher's exact test

表２　StageとRoutine CSの有無の関係

N=36	Routine CS		
	あり	なし	
Stage 0–Ⅱ	23	5	28
Stage Ⅲ–Ⅳ	2	6	8
	25	11	36

結論

死亡例・増悪例は進行病期が多く，診断の遅れが予後に影響している可能性が示唆された。早期Stageでの診断が重要であり，そのためには２年以内のRoutine colonoscopyの実施が重要であると考えられた。

謝辞

この度は栄誉ある杏林医学会学生リサーチ賞を賜り，大変光栄に存じます。選考委員の先生方，杏林医学会の先生方ならびに関係者の方々に厚く御礼申し上げます。一つ目の演題“当院における潰瘍性大腸炎関連大腸腫瘍の治療実態と成績”は第54回杏林医学会総会で発表させていただ

きました。もう一つの受賞演題として，“診断時に特発性血小板減少紫斑病の合併を認めたステロイド抵抗性の潰瘍性大腸炎の１例”を，医学生・研修医・専攻医の日本内科学会ことはじめ2025大阪にて発表し，優秀演題賞を受賞いたしました。このような機会を与えてくださった，久松理一教授，森久保拓先生をはじめ，消化器内科学教室の先生方に心より感謝申し上げます。

【指導教員】医学部消化器内科学教室　教授 久松理一，助教 森久保拓

引用文献

1）Ola Olén, Rune Erichsen, Michael C Sachs, Lars Pedersen, Jonas Halfvarson, Johan Askling, Anders Ekbom, Henrik Toft Sørensen, Jonas F Ludvigsson. Colorectal cancer in ulcerative colitis: a Scandinavian population-based cohort study. Lancet. 2020 Jan 11; 395(10218): 123-131.

2）Hisamatsu T, Miyoshi J, Oguri N, Morikubo H, Saito D, Hayashi A, Omori T, Matsuura M. Inflammation-Associated Carcinogenesis in Inflammatory Bowel Disease: Clinical Features and Molecular Mechanisms. Cells. 2025 Apr 9; 14(8): 567.

3）David T Rubin, Ashwin N Ananthakrishnan, Corey A Siegel, Bryan G Sauer, Millie D Long. ACG Clinical Guideline: Ulcerative Colitis in Adults. Am J Gastroenterol. 2019 Mar; 114(3): 384-413.